

季刊 連句 第26号

平成元年九月一日発行



口伝 (南柏雑記 24) ..... 1  
 旅三章 I 永遠とものあわれ.....草間時彦..... 2  
 「薦の羽も」の巻 鑑賞 (V).....東 明雅..... 4

世界俳句大会

「おもかげの紅粉の花」の記 .....下鉢清子..... 8  
 「おくのほそ道」の恋句 (講演要旨).....東 明雅..... 9  
 半歌仙 紅粉の花 .....笹 白舟 捌..... 11  
 膝送り二十韻 蔓手鞠

「蓑虫」付勝練習二十韻 ..... 12  
 豊田ころも連句会  
 連句の種蒔き .....由川慶子..... 14  
 三河の旅 .....東 明雅..... 15  
 歌仙二巻 猿投山 梅雨晴れ ..... 16  
 二十韻三巻 夏料理 杜若 赤米 ..... 18  
 連句のすゝめ .....斎藤吾朗..... 19

第三十回 猫蓑会 歌仙六巻

捌 市野沢弘子・大窪 瑞枝・坂本 孝子.....20  
 杉江 杉亭・中島 啓世・山口みづゑ  
 月の句について .....東 明雅

関口連句教室

歌仙 麦稗蛇 .....杉内徒司 捌..... 26  
 百回記念の会 .....東 明雅  
 興流連句会 ..... 28  
 膝送り二十韻 竹落葉  
 雁帛往来 ..... 29

表紙 (猫) 宮崎龍火子

口伝

南柏雑記 24

雅

七月十五日、山形市々民会館で挙行された世界俳句大会では、珍しく連句の興行が上演され、私は笹白舟先生はじめ北陽社の皆様と出演した。その出を待つ楽屋でのことである、北陽社の一人で、その日執筆の役をされる内田素舟さんが、私の傍に寄って来られ、

「猫蓑は凄いですね、ちゃんと脇のテニハ止めの場合は心得を知って、実行しておられますね」と言われる。私ははじめ、何を言っておられるのか分からず、ハアと問い返すと、内田さんが、「これですよ」と示されたのは、つい先日の青時雨忌で巻いた作品の第三までであった。

妙覚の峯仰ぎ見る五月晴

瓢左仏

俳諧万巻風薫りけり

正江

冷用酒玻璃の器に供されて

千町

内田さんの説明では、脇の句は多くは体言止めであるが、例外としてテニハ止めが用いられた時は、第三の上五を漢字で一続きの単語を出す、これを「五つ文字」とよぶのだそうである。なるほど、その後で北陽社の作品集「北陽連

歌集」を拝見すると、たとえば、

立還る春や又蒔く花の種

日永の足結子らと若やく

揚雲雀茶屋にはしの憩して

と、脇句がテニハ付けのものは、すべて第三はスミのテニハを切って「五つ文字」となっている。

このような口伝をしっかりと守って来られた北陽社の方々

が、青時雨忌の会で瓢左仏追善の一卷を見られ、脇がテニハ止め、第三が「五つ文字」に感激されたのであろう。この口伝は、同じ伊勢派でも芦丈先生の流れにはつたわっていない。だから、私も作者の千町さんも、第三は丈高く、大山体で行こうとはしたものの、「五つ文字」などの口伝があるとは、今の今まで知らなかったもので、賞められて、何か尻こそばゆく、冷汗が出るような気であった。

たしかに、脇がテニハ止めの場合は、ことに第三の上五文字をテニハを切ってきっちりとしたもので固めると均衡もとれて、格好がよいことは事実である。この青時雨の会の時は、偶然、具合よく行ったのであるが、今後は猫蓑の中でもこの口伝を守らせていただきたいと思う。

それにしても、明治の三森松江から八十年、連句は殆んど滅亡に近かった年月を、よく耐えて、俳諧の伝統を守って下さったのだと、改めて北陽社の方々に感謝の辞を捧げたい。

## I 永遠とものあわれ

ヨーロッパの旅から帰ったばかりである。私は毎年六月に海外に出掛けることにしている。六月と決めたのは、その月が用事や行事の少い月であることのほかに、喘息持ちの私には、梅雨を避けて乾燥した土地に遊びたいという生理的要求もあるのである。日頃、日本という風土に棲み、俳句という日本的な文芸に頼まどどっぷりと浸っている身にとつて、十日でも半月でも俳句から全く離れたところで暮すということは、いろいろな意味でプラスなのである。

今年の旅はスペインに飛んで、マドリッドからバルセロナを廻り、ウインからパリに出て帰国というコースだった。各地二泊ずつというゆっくりした旅だった。旅行社のツアーに参加したので、俳句とは全く縁のない旅である。

強烈な印象を受けたのはバルセロナのガウディの建築だった。殊に聖家族教会と呼ばれるサグラダ・ファミリア教会はことにそうだった。私が印象的というのは、ガウディの建築ばかりではなかった。百メートルを越す円錐型の四つの塔はたしかに感動的だった。だが、もう一つ、感動し、考えさせられたのは、この建築の建つききさつである。

この教会の建築を計画したのは一八六六年である。建築

が始まったのは一八八一年、ガウディが引受けたのは一八八三年、三十一歳だった。この個性的な建築家は、一九二六年、七十四歳、交通事故で没するまで、この建築にかかづらっていた。しかし、半分しか完成していない。現在は、ガウディの弟子達が継承して、工事はつづいている。私が行ったときも、鉄材が吊り上げられ、塔の尖端に近いところの工事が進んでいた。しかし、完成するのは、百年以内ということはないという。資金が集ったら、集っただけ工事をするのでそうである。完成は百年か二百年先になるだろうという。このところ、寄進が多いので進んでいるが、百年はすぐ経ってしまうだろうという話である。

気の長い話である。日本ではとうてい考えられない話だ。しかし、これは、ガウディの建築ばかりでない。歐洲のどの聖堂でも、何百年の歴史を持ち、建設は百年、二百年を要している。

パリのノートルダム寺院の着工は一六三三年で、二百年近い建設期間を要している。これにくらべると、ガウディの聖家族教会は稚いとさえ言えよう。

マドリッドの郊外のトレドは教会の街である。この街の

カテドラルは一二二六六年に建設が始まり、一四九三年に一応完成している。

ここにはカトリックの教会のほかにユダヤ教の寺院があり、回教の信徒もいた。外敵の侵略と戦いながら、この街は完全な姿で現在も残っている。

私はガウディの聖堂を仰ぎ、トレドの石畳の径を歩きながら、ここには永遠が存在するのを知った。建築は永遠なのである。

それは聖堂ばかりではない。民家もそうだ。

旅の終りの日に、パリで小池文子さんのお宅を訪れた。小池文子さん、即ちペロニー文子さんは「杉」同人。パリ在住が長い。古い「鶴」の仲間である。ペロニーさん夫婦の住居はナポレオン三世当時の建物だと言う。天井の漆喰に特長があるそうだ。だから、家具もナポレオン三世時代のものである。

私は今度の旅で、古い教会に入るたびに、「平家物語」の冒頭の部分を思い浮べた。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰のこころをあらはす。おこれる人も久しからず、只春の夜の夢のごとし」

日本人は木と紙の家に住んでいる。地震があり、火事も多い。日本の建築には永遠という感覚はない。日本の建築工事で、百年、二百年をつづけるということは考えられない。途中で、地震があったり、火事があったら、それで終

りなのである。

生きている者は死ぬ。形あるものはこわれる。という日本人の諦念は、木と紙の家から生れたのではないだろうか。生きている者が必ず死ぬということから、ものあわれという心が生れたのかも知れない。

西欧の教会を仰いでいる限り、私はものあわれという感慨とは全く無縁だった。

トレドの近くには、至るところにオリーブの畑がある。

オリーブの低木が瘠せた土にしがみつのように立っている。スペインのオリーブは世界の八十パーセントを産するという。そして、このあたりのオリーブの樹は千年から千五百年の樹齢があるという。雨が少なく、乾いた土地だから、なかなか成長しないのである。そういう樹だから、オリーブがうまいのだ。日本の場合、瀬戸内海の島に植っているオリーブは二十年ぐらいで大きく育つという。水が豊かで、土が肥えているからである。ただし、その実はうまくなく、油も乏しい。樹が育つのに千年を要するならば、樹の生命は永遠である。永遠の樹を伐るといことは、まさに罪悪である。

その点、日本の場合は、二、三十年で樹が育つものだから、伐ることに罪の意識が乏しいのも無理はない。生命の再生作用が行われるのである。それは春夏秋冬の四季の輪廻と通じていると言ってよいだろう。だから、飛花落葉を美とする日本の美意識は決して、敗北主義ではないのである。

永遠という思いと「おこれる人も久しからず」とは相容

た。こういう荒野の風景から、ユダヤ人のユダヤ教の

れない。西欧人には諸行無常は理解出来ないだろう。又、木と紙の家に住む日本人には永遠の建築に威圧感を受けるのみかも知れない。そんなことをしきりに考えた。

バルセロナの東にはカタロニアの荒野が近づいている。そこには、堀田善衛さんが住んで、藤原定家の日記「明月記」についての随想を書いていらっしやる。堀田さんは私の住む逗子の住人である。それが「明月記」について書くにカタロニアを選んだということはどういふことなのだろう。堀田さんの「カタロニア讃歌」を読んだ五年前にはそれは判らなかつたが、今度、スペインに行ってみていくらか判つたような気がした。それだけでも今度の旅は成功だつたと言える。

私はトレドの丘に立って、荒れた野を見下しながら考え

## 「鶯の羽も」の巻 鑑賞(V)

東 明 雅

連句をやってみたらどうなるのだろう。どんな作品が出来るのであろうか。

日本では想像出来ないような斬新な、しかし、みだれた作が生れるだろうか。それとも、日本でやっているのと全く違わない歌仙になるのだろうか。もし、前者だったとしたら、感覚の柔軟を讃えるべきか、それとも変り身の早さを難するべきか。後者ならば、土性骨を讃めるべきか、それとも閉鎖的な島国根性を悲しむべきか。どんなものなのだろう。

猊叢の皆さん。いかがですか。スペインでもよい、サハラでもよい、乾いた荒野にお出掛けになりませんか。

(以下次号)

15

三里あまりの道かゝえける

この春も盧同が男居なりにて

(春。居なり。人情他)

史邦

(現代語訳) 今年の春も、あの盧同のところの下男は出替わりせず、主人の使いに三里あまりの道を通って行く。

(付心) 其人の付。前句の三里あまりの道をかかえた人を説明した句。

(付味) 前句の三里あまりの道をかかえた人の気分、付句の三月に居なりとなつて、あと半年または一年奉公することになった人の気分、いずれも何か行先が遠い、のんびりと気永にやりましようといった気分が通いあいうつりあっている。ことにその男が盧同というような茶人の下男とされているので、ますます、春の駝湯とした気分になった。

(転じ) 打越の水前寺を賞翫している人とは身分も境遇も全く違つたものを出して、転じている。

(補説) 裏の月の定座(六句目あるいは七句目あたり)を過ぎて、史邦はそのことも念頭にあつたと思うが、ここで月を出そうとすると、夏の月では二句前に夏があつて近いし、秋の月を出すと、秋の季語は三句続けることになつていから、十七句目の花の定座まで秋季になり、花が出にくくなる。さればとて、冬の月を出すと、前句と一つになつて道を急ぐ気分になるだろう。それでは「股引の朝からぬる、……」の句と同境になる故、春季をもち出して、ゆっくりとした気分にして、改めて次の二句の作者に春季の月と花とを待たつたものであろう。

盧同は唐の詩人・茶人として有名で、「茶歌」(「古文真宝」前集)の作者。男は下男・下僕のことであるが、ここで盧同の下男をわざわざ出したのは、盧同に寄せた韓退之の詩に「玉川先生洛城裏 破屋數間而已矣 一奴長鬚不裏頭 一婢赤脚老無齒」と「古文真宝」前集にあるのが、当時の日本人にも広く知られていたからである。江戸時代、僕婢は半期契約で、二月・八月、後には三月・九月がその交替期となり、これを出替りと呼んだ。居なりは出替りせ

ずに、そのまま重ねてその家に奉公することをいう。

もちろん、唐の時代に出替り制度があつたわけではないだろうが、盧同に似た隠逸詩人なら誰でもよいわけで、例の「冬の日」の「日東の李白が坊に月を見て 重五」の伝であらう。

ただ、このところ12の芙蓉の花、13の水前寺海苔など、いずれも茶人このみの景物があるので、いささか同じ気分が続いているという難があるが、下男を出した効果は大で、今までの雅の世界から、俗の世界に転ずることができたのである。

16

この春も盧同が男居なりにて

さし木つきたる月の朧夜

(春。朧夜。人情無)

凡兆

(現代語訳) 今年の春も盧同のところの下男は重年し、園のさし木も、おぼる月の下に見ると、よくついているよ

(付心) 其場の付。また天柵の付。

(付味) 「俳諧古集之弁」には「かれがさしつる枝の芽出せし風情ならん。居なりにつきたるは句ともいふべし」とあり、「秘注俳諧七部集」には、「其男ノサシタル木トミテ、居ナリト言ニツキタルトハヒキキ也」と説明している。芭蕉の余情付には、ひびき・句い・うつり・位などの名目があるが、その違いは微妙で迷うことが多い。

この場合、隠者に召し使われた下男が満足しきって出替

りせしようにとせぬのどかな安定した気分が、寸可の句、

のついた満足感・安心感に交流し交響しあって、完璧な詩の世界を現出する。このようなものを普通句の付けといふ。ひびきの付けとは、もすこし激しい気分の交流・感合をいうのである。

(転じ) 打越が人情目の句であるのに対し、この句ははっきり人情無(場)の句であることに大きな転じがある。その挿木はもちろんその下男がさしたものであるが、それを表面に出すと、三里の道をかかえているのも、居なりになっているのも、挿木をさしたのも同一人となつて、まづいのである。だから、旧注の殆んどが、下男が挿木する様子と解しているが、これでは折角の凡兆の苦心を無にするものであらう。

このあたりの四・五句は、やや同境に停滞しているように見えるが、細かにみるとやはりそれなりに気分が変化している。打越と前句との間には、いささか俗にくだけたし加しのんびりした気分が漲っているが、前句とこの付句になると、春もややたけ、すっかり落ちついた安定感と、春の夜の清閑の情が溢れている。このような微妙な気分の変化は、この集の見所の一つであらう。

(補説) 凡兆もこの句を作る時、月と花とをどうするかを考えたに違いない。月の定座はすでに過ぎ、花の定座は次の17である。前句が春であるから、春の月しか出せない。それで前句の盧同の下男の位にあわせ、居なりという語に叶った挿木を選んで、これと朧月とを結んだものである。挿木のついた春の夜の仄かな息吹きみたいなものが朧月

手水鉢は、普通座敷の縁の外に立てられ、石を穿って手洗の水を入れるものである。この手水鉢は家によって大体立てられるところが一定し、好みによって、あちらこちらに変えられるものではない。

もし、位置を好みによって自由に変えられるものとすれば、それは茶庭の一部などに低く据えられた手水鉢(つくばい、蹲踞)のことであらうか。但し、つくばいを置くような茶庭には、花(桜などは特に)は植えないのではなからうか。また、あまり、茶庭の印象を強くすれば、打越の盧同が茶人であるからその気分に戻るおそれなしとしない。そうなれば、この庭は、別に茶庭と限定しないで、素人の庭いじりのすきな男が、花の咲く木もつくばいも、自由に取り入れて作った庭を想像すればよいであらう。

さらに、花に並ぶるといふ意味を、苔のついたままの手水鉢を運んで、花の咲いた木の傍に並べる庭いじりの実景と説く者が多い。しかし、考えてみると、月の朧夜に庭いじりをするといふのも何かおかしいではないか。尤も、曲齊の「七部婆心録」では、「此比築立の庭ト見立、俄思付の用を付たり。苔ながら花に並ぶる手水鉢トハ、花ながらさしたる山つゝじ也。此辺につくばひ置ばよからむと思つゝ俣に気を奇ち、明日も待ず古手水鉢を掘上、泥も洗はず苔なりに並見るを、手伝ふ男等が気短な隠居也と思ふ様也」と解している。こんな奇つた気分が花の賞翫に叶うかどうか、また、この花を山つゝじ也と言ふのは、曲齊一流の独断と偏見であり、古来、蕉風俳諧では「花といふは桜の事

の夢幻的な気分と相俣つて、お伽噺の世界のような感じを出しており、そのリズムも快い。

花前の句(花の句の前句をいう)は軽く付けるといふのが慣わしである。この句は朧夜の園中の景を描いた軽い叙景の句である。花前に植物を出すことはあまり好まれないが、それは高い樹木などの場合は花に障るが、ここはまだ小さい挿木のこと、花に障ることはない。

17

さし木つきたる月の朧夜

苔ながら花に並ぶる手水鉢

芭蕉

(現代語訳) 月の朧な夜、花と苔むした手水鉢とをならべて見るのできるこの景色はすばらしい。

(付心) 前句が人情無(場)の句であるから、それに人情の句を付けると起情の付となるが、この句は補説でも述べるように、人情は極めて薄く、むしろ其場の付と見る方がよい位である。

(付味) 「苔ながら花に並ぶる」という幽艶な情緒は、まさに「一月の朧夜」という前句のゆたかな匂いに移したものである。

(転じ) 打越からの春三句、気分としては大体同じようなものが続いている感じであるが、打越の盧同の下男の句と、この朧夜の閑庭の描写とでは、題材・表現上の変化はもちろんのこと、気分にも微妙な相違が見られる。

(補説)

ながら都て春花をいふ(「三冊子」)にも背くことにならう。前句の優艶さに相応するものが、桜か山つゝじかの判定は自ら明らかである。

このところは、手水鉢を花の咲く傍に移したのは事実だが、それはもう以前のことであつて、その結果として現在は、花と苔むした手水鉢を並べて見ることできる景色を楽しんでいる状況だと見る方がよい。

次に、この花の句は、花を従とし、手水鉢を主としている。これは四句隔てた前に「芙蓉のはなのはら〜とちり」という句があり、そこでは芙蓉の花が主として描かれているので、それと重複しないための心遣いである。

さらに、この一巻は去来(A)・芭蕉(B)・凡兆(C)・史邦(D)の四吟であり、膝送りのやり方通り、A・B・C・DとB・A・D・Cが繰り返されて来たのである。この通りに進行するならば、この花の句は当然Aである去来であるべきであるが、ここで始めて付順を変更して、芭蕉(B)になっている。これは去来は発句を取っているから、初折の花を遠慮して、芭蕉に譲ったものであらう。因みに、一巻の中で月・花の句は特に賞翫されるものであるから、連衆で公平に分配されることが必要である。この巻を見ると、月の句は芭蕉・凡兆・去来、花の句は芭蕉・凡兆が取っている。発句も名譽な場所だが、この巻では去来が貰っている。それに対して史邦は月の句も花の句も貰っていない。理由は分らないけれども、史邦が少し可哀そうな気がする。

# 世界俳句大会

平成元年七月十五日

於 山形市民会館大ホール

## 「おもかげの紅粉の花」の記

下鉢清子

東北地方五県轡を並べての、奥の細みち三〇〇年フェスティバルは、夫々の工夫のもとに俳句関係の行事を組み込んでいるが、山形市では「世界俳句大会」と銘打って、七月十五・十六日を中心に多くの行事が持たれた。

この中で画期的なものは、東明雅先生のご講演「奥の細道の恋句」と、連句の座の公開であったと思う。

講演前日の十四日に出発した私達は、講演前ながら余裕のひとつ刻を、山形市内見物に向かれた先生にお伴をして、最上義光息女駒姫の菩提寺恵称寺を振出しに、千歳山万松寺、陶の里平清水へと一巡する。殊に陶の里のどんづまり天沢窯は、山野草の手入れの良く行き届いた庭に、無欲無心の女主人の振る舞い、隣の桑畑は羚羊の好物で、満足した羚羊の昼寝の場所と聞くと、まことに俗界を離れて仙界に居る気分、心の豊かさは一服の清涼剤となった。夕食は山形牛のステーキ、処女牛四歳ぐらいが食べ頃というおい

しさ。ほろ酔の一行は宿で膝送り二十韻、豊臣秀次事件の駒姫を偲びつつ

駒姫がゆかりの寺や蔓手鞠

千町

を、発句に「蔓手鞠」の巻を満尾した。

翌十五日の関心は、何と云っても明雅先生のご講演と、連句の座の公開場面である。俳諧師芭蕉が新境地開拓のため東北行脚の道々、連衆と巻かれた歌仙の中の恋句の数々を、配布の資料を示しつつのご講義は、参集者を魅了した芭蕉としてではなく、俳諧師芭蕉であることを啓蒙した意欲深いものであった。持ち時間は当初二十分とのこと

で用意万端整えられておられたのに、直前に十五分と申し渡されたとのこと、随分と苦慮されたことと思うが、聴講者はそのようなことは露知らず、名調子に聞き惚れた。連句の座の公開は、主客を明雅先生、新庄の笹白舟氏を宗匠に、一門の北陽社の人々を含めて連衆七人、司会のNHK・飯窪アナが曾良の扮装とて、墨染の衣に網代笠を被った趣向である。少し肥り気味の飯窪曾良に一座が和む。

山形は紅花の産地、丁度花も摘みとりの頃に八まゆはきを佛にして紅粉の花 翁Vを、心に明雅先生の発句挨拶、

おもかげも三百年や紅粉の花

明雅

脳句また八蚕虱馬の尿する枕もと 翁Vに思いを馳せて

蚤も蚊遣りも思ひ出の道

白舟

急所々々の先生の助言と解説、ゆとりのある空気が、飯窪曾良の軽いタッチの司会と相俟って、舞台の絵屏風前に連句浄土を出現させた。この楽しい雰囲気は会場を包み、思いがけない付句が会場から飛び入りしたが、残念ながら短句に短句の付けであったため、不採用になってしまった。

会場が忽ち大きな座と化するのも連句の効用であろう。帰途、山形駅で上田五千石先生とご一緒になった。

「明雅先生は名優でしたね。」

と、しきりに感心、良い締め括りの言葉であった。

## 「おくのほそ道」の恋句

(講演要旨)

東明雅

「おくのほそ道」を旅した時の芭蕉は、墨染の衣を身にまとい、杖をつき、山寺の蟬に聞き入り、高館の夏草に滯する、まさに自然詩人であり、旅の詩人であり、わび・さびの詩人でありました。それは間違のないところですが、その彼が、旅の途中で作った俳諧を読んでみると、処々でハッとするような恋句、浪漫的で、官能的とも思われるもの

たとえば、那須の翠桃の家で作った句、

あの月も恋ゆゑにこそ悲しけれ

翠桃

露とも消えぬ胸のいたきに

芭蕉

わが生命よ露のように消えてしまえという綿々として尽きぬ恨みの情が感ぜられ、若い女性の情熱が激しく、切実に謳われ、すばらしい恋句だと言わねばなりません。

尤も、叶わぬ恋のため、露のように消えたいというのは、決して新しい発想ではありません。古くは万葉集以来、古今・新古今、あるいは伊勢物語から源氏物語と流れてくる伝統文学の中では、使い古され、言い古されたものですが、それを俳諧にこのような形で取り入れたのは芭蕉が初めてでした。

次に芭蕉は須賀川の等躬のところ

宮に召されしうき名はづかし

曾良

手枕に細き腕をさし入て

芭蕉

とも詠んでおります。この芭蕉の付句はそのまま、閨房における女性の姿態を描いております。読者はその手枕を通して女性の顔つき、体つき、動作までも想像することができるではありません。まことに官能的な句であります。

次に羽黒山本坊での興行では、

月見よと引起されて耻しき

曾良

髪あふがするうすもの露

芭蕉

これも中古の宮廷、または貴族の邸での遊びの一コマでもあります。ようか、源氏物語にでも出てくるような一節であります。

歌・物語の伝統を受けついで、その気分・情緒をもって生命とし、それを一層、発展させ、洗練させたもので、貞門・談林の恋句が、あるいは詞のおそびとなり、あるいは放埒なものとなっていたのにくらべ、格段の相違が見られるのであります。

墨染の衣に身をやつし、奥州の野を漂泊した芭蕉が、このようにすばらしい濃艶な恋句を詠んでいるという事実、これに対して皆さんは、何かそぐわないという感想をお持ちの方が多いいのではないのでしょうか。

そして、この奇妙な異和感に、最初に悩まれたのが、元東北大学教授の小宮豊隆先生でありました。先生は「芭蕉の研究」という本の中で、「言わば神と人間とが同時に住んでいたようなものである」とされ、わび・さびの詩人と濃艶な句をよむ詩人、この二つが芭蕉の中でどのような関係で住んでいたのかと悩んでおられます。

しかし、考えてみれば、古代から日本文学の主流であった和歌もその中心は恋歌であり、その伝統が連歌・俳諧の中にも流れて、俳諧では一巻の中、必ず一ヶ所は恋句を詠まなければ、その一巻は「はした物」（はんばなもの）として連句の作品とは認められぬという伝統がありました。だから、芭蕉も俳諧を作る以上、恋句は避けられないものだったのであります。

それはたとえば西行法師に熱烈な恋句があり、連歌師の宗祇にはすぐれた恋句があるのですが、誰もおかし、あ

やしいと思わぬのと同じく、俳諧師の芭蕉が恋句を作っても、それは西行・宗祇にならっているまでで、決して不似合なことでありません。

しかし、芭蕉の恋句は、この古典の伝統によるものばかりではありません。金沢の山中温泉で巻いた一巻には

遊女四五人田舎わたらひ

曾良 芭蕉

落書に恋しき君が名もありて  
などの一句は、彼が旅の途中でみた遊女の姿を写しているのでしょうか。そう言えば、「おくのほそ道」の本文にも市振の宿で遊女と泊まり合わせた記事が出ておりまして、興味をそえられるのでありますが、ともかく、このように、現実の世界に題材を求め、それにしおりとあわれを与えたものも交じっております。これはいわば「軽み」の世界でもあり、この旅の中で工夫され、磨かれ、元禄三・四年以後はすっかり、この作風になりました。

このように、さまざまの恋句を残した彼は決して人間世界に背を向けたのではなく、人を愛するように自然を愛し、自然を愛するように人を愛した暖い心の持主だったのであります。

皆さんは彼の俳句（発句）・紀行文のみならず、彼がこの旅で作った俳諧（連句）を読まれることによって、今まで見られなかった芭蕉の新しい世界に接せられることができるのであります。文庫本の奥についている曾良の「俳諧書留」をおよみになるよう、おすすめ致します。御静聴ありがとうございます。

半歌仙

紅粉の花

笹 白舟 柳

おもかげも三百年や紅粉の花  
蚤も蚊遣りも思ひ出の道  
珍しままに土産を買ひ足して  
良き湯加減に軽き鼻唄  
職退いて仰ぐかりがね今日の月  
野趣そのままに活けし穂芒  
神苑に太鼓のはづむ秋祭  
漫画の面をせがむ稚児たち  
愛想の良さを売込む片笑窪  
許婚など何のものかは  
仁の医師鬼手仏心の額あげて  
戸の隙間から雪の来客  
かまくらは童話の世界冬の月  
全町挙げて綱の引き合ひ  
酔ふほどに一つ覚えの新庄節  
裾より峰にのぼる囀り  
花衣バスで乗込む吉野山  
伸びる県都に霞棚引く

東 明雅  
笹 白舟  
浅沼 葛子  
斎藤 孤柳  
内田 素舟  
金沢 苦舟  
富沢比佐女  
素 柳  
子 白  
女 苦  
柳 子  
苦 子  
白 素

膝送り二十韻

蔓手鞠

駒姫がゆかりの寺や蔓手鞠  
夏の襦の茅の輪ま緑  
練り上げし館の加減をためしゐて  
問はず語りに借景の庭  
漕ぎてみな月の湖心をめざすごと  
秋の蚊帳吊りミシン踏むなり  
クラクシヨシ鳴らされてゐてややや寒し  
口付前後しかと齒磨  
ひと昔天井のしみ鄙の宿  
パリ革命二百年なる  
毛衣を着に教師あねむりし  
撥の在庫がとて心配  
飲めば飲む飲まねば飲めと強意見  
孫太郎虫売りに来る月  
太夫から鹿恋に落つる色の道  
ゼミの帰りを待つて云ひ寄る  
海は噴き山は崩るる世なりとも  
蛇の目の傘が傘立に立ち  
花がたみ入れ子の箱は八角形  
薄葉ふはと桜貝置く

千町 清子  
和子 文人  
江和 徒司  
清江 徒司  
町人 徒司  
江和 徒司  
町人 徒司  
清江 徒司  
和子 文人  
清子 徒司  
江和 徒司  
町人 徒司

平成元年七月十四日  
於 山形ホテルキャッスル

養虫

付勝練習二十韻

東明雅

切締句投 10月20日

七句目さりげなくお守りだよと犬はりこ  
八句目 回教国は酒も御法度  
九句目

- |    |                   |     |
|----|-------------------|-----|
| 1  | バカチョンとひとつ憶えのナマステと | 良子  |
| 2  | 音たてて地球の揺れる一日あり    | 隆秀  |
| 3  | 礼拝の時もてあます異邦人      | 昌子  |
| 4  | チャドルから覗く瞳の黒々と     | 久子  |
| 5  | 次期政権ターバンの色は白か黒    | 治子  |
| 6  | 毎日を駱駝の背に揺られつつ     | 詩子  |
| 7  | バザールの賑はひくぐりぐったりと  | 雄次郎 |
| 8  | 神殿の壁にきざみしアラベスク    | 妙子  |
| 9  | デパートの食堂禁煙席のふえ     | 美鈴  |
| 10 | 望郷の夢もとだえてカスバ住み    | 正雄  |
| 11 | 支社長は肩書きのみの雑役夫     | 淑子  |
| 12 | シロッコの続く季節を耐えてをり   | 美和  |
| 13 | 輪を描く鳩映りくる玻璃の壺     | よしえ |
| 14 | 天平の豊反りよく鬼瓦        | 千雪  |
| 15 | 天安門の言ふ民は処刑され      | 澄子  |

元子  
和久

※が中心であり直し様はないが、15は「もの言ふ」を何かに直せば生きるのではないか。

次に打越にお守りが出ています。お守りは神祇・釈教どちらでも通用する、宗教色のあるものである。尤も、前句の回教国も宗教の範疇に入るだろうが、打越にあってはまずい。3の礼拝、8の神殿、14の天平の壺などは駄目である。それから打越は恋句でもあった。4のチャドルから覗く瞳は明らかに恋句であるから、この句も失格である。

さらに裏の折立から室内の様子が三句続いている。前句は内外分かれぬが、これにまた室内の景は付けたくない。外の景とした方がよいと考えた。それで9の禁煙席、19の古文書のページくるの二つはともにすぐれていただけども、この点から落すことになった。

また、打越に犬はりこが出ています。犬はりこは玩具で、実際の犬ではないけれども、四足の哺乳類である6の駱駝とはやはり近すぎるのではないか。

次に大打越に制服が出ています。ここにターバンを出すのは、式目では許されるだろうがすこし近いような気がする。それで5も削ることにした。

2はどのような事件を言っているのだろうか。大袈裟な表現がおもしろかったが、前句への付味は今一歩か、10は昔のフランス映画、ジャンギャパン主演「望郷」をモデルにしている。この映画は感銘の深いものだっただけに10の外、12をして16もヒントを得ているように思われる。シロッコはアフリカから地中海沿岸にかけて吹く季節風であり、16

- |    |                  |     |
|----|------------------|-----|
| 16 | 流れ来てここは地の涯アルゼリア  | 美幸  |
| 17 | 大時計かたりと針の動きたる    | 遊子  |
| 18 | 「悪魔の詩」書いて生命を狙はれて | 智子  |
| 19 | 古文書のページくる窓砂あらし   | 達子  |
| 20 | 原色のネオンきらめく窓暮るる   | うせい |
| 21 | 赤道を北へか南いづくせむ     | 鋭太郎 |
| 22 | 沙漠ゆく四輪駆動日本製      | 淳子  |

(応募受付順)

応募二十三通の中、全く前句に付いていないと思われる句はなかった。流石である。しかし、さればと言って全部付けるわけにはいかない。何とか彼とか文句を付けて落さねばならないのは辛い。辛いと言っても仕方がない。

まず、打越の句に障るものとして、七句目は何か物を言っている姿だから、これに障るものは削った。1は「日本人の旅行といえばバカチョンカメラ。それにインド・パキスタン・ネパール・ベンガラデシの旧インド圏では、ナマステを使いさえすれば、お早う、今日は、今晩は、すみません等、ゼスチャア交えれば適宜通じますので」という註が付いていて、初めて見た時から興味ふかく牽かれ、最初はこれで治定しようと思った。しかし、打越が「お守りだよ」と言っているのに、この句でまた「ナマステ」は障ると考え、残念だったが落した。15も同じである。この句を見た時、時事の句としてすばらしいし、これで行こうと決心したのであったが、「もの言ふ」がひっかかることを知っておぼろしくした。ただ、1はナマステの音もしるべき

は流行歌「カスバの女」の文句取りである。いずれもおもしろく感心したが、よく味わってみると、打越の気分、情緒に近いのが気にかかる。11も似たようなものが感ぜられる。この際は22沙漠ゆく日本製自動車のように、ちょっと勇ましいのが望ましいが、「四輪駆動日本製」ではあまり即物的である。21は表現に推敲が足りないし、20は前句との付味が問題である。原色のネオンがきらめくと言えば、誰でも酒場や女性を連想するだろう。前句はお酒を否定しているから付味が悪いのである。18は時事の句とも考えられるが、ひとところ大さわぎだったこの事件も、今はやや影がうすい。13と17はともに会釈というよりは通句である。通句でもよい場所ではあるが、有心の句でよい句があればそちらを優先したい。

結局、残ったのはバザールを詠んだ句が二つであった。比較するに7の句は、バザールの賑いとそれに疲れはてた自分を詠んでいるから、やや自他半に近いのではないか。同じ自他半と言っても、打越は夫と妻の立場であるから、はっきり転じは出来ているものの、治定の句が、バザールで水煙草を吸っている男たちの群像を描いているので、転じという面から優っているだろう。この句も仔細に見れば、前句の「酒も御法度」というもの字に対して、果して十分に応えているか疑問だし、「水煙草吸ふ」のは、大打越の「くつろぐ」に似ているとも言えようが、イメージがうんと違ふし、屋外の多人数で活気があり、転じは十分と見たので治定した。欠は難で人情の句が欲しい。



# 豊田ころも連句会

平成元年六月二十日・二十一日

## 連句の種蒔き

由川 慶子

平成元年六月のある日、明雅先生御夫妻は三河安城駅に降り立たれた。かつては、東洋のデンマークといわれた安城も、今では工業化、都市化が進んでいる。それでも車の窓からは、日本一の生産高といわれる無花果畑が多く見えた。

赤米のちまきが名物の「小伴天」<sup>こばんでん</sup>では、西尾市の斎藤吾朗さんの「白桃」、俳画教室のお弟子さん、吾朗さんの大作「赤米伝承」の絵のモデルで、赤米を作っていらっしやる鈴木さんとそのお友達、そして、豊田市の「ころも」の連衆がお迎えした。

品位高く捌いていられるであろう明雅先

生のグループ、笑い声の絶えない矢崎藍のグループ、大らかに楽しんだ吾朗グループ、さてその雰囲気か作品にどうあらわれたか？初対面の方々と心を開いて楽しむという、連句の不思議さを感じる一日であった。

翌日、豊田市の北端にある猿投神社<sup>さるひ</sup>の傍にある「棒の手会馆」(棒の手というのは猿投地方の伝統芸能である)へ明雅先生をお迎えした。ここは「ころも連句会」が、月一回定期会場にしている所で、広い地下の大きなガラス戸のすぐむこうは山である。春先には桃の花畑を通して、ここに、集うのである。

ここでは、明雅先生の捌きを、一度も体験したことのない人を優先して、捌いていただいた。全く初心の人にも、優しく指導して下さる明雅先生を拝見して、改めて、その道のトップにいられる方のすばらしさ

を痛感し、連句を続けていて良かったと感想を洩らしたSさん。多分、皆、同じ思いだったと思う。

「連句入門」一冊を頼りに、やみくもにあがっていた二年間、明雅先生の御指導をいただくようになって三年、しかし、私個人で言えば、蕉風の何たるかもいまだわからず、さまよっているのが現状である。

三百年の昔、芭蕉の旅の本当の目的は、何だったのだろうか。新庄で、酒田で、連衆はすべて超一流の才能の主ばかりだったのだろうか……などと明雅師とイメージをダブらせてみたりもする。

この二日間、明雅先生は、連句の種蒔きに専念されたのだと思った。三河の地に種は蒔かれたのである。幸い、吾朗さん、藍さんというユニークなリーダーを得て、若手・新人の成長に期待できるのではないかと思っている。

連句への思いを新にする二日間であった。

## 三河の旅

東 明雅

六月二十日、ころも連句会の方々のお招きで愛知県豊田市を訪問した。当日十一時半、三河安城駅に着くと、由川慶子さん、加藤治子さんがお出迎え下さって、加藤さん運転の車で碧南市の「小伴天」というお店へ急ぐ。「小伴天」にはすでに、西尾白桃連句会の斎藤吾朗さんをはじめ、水野克宣さん、嶋村博さん、それに且て私が信州大学で教えたことのある小笠原優さんの姿も見えて嬉しかった。その外、安城市で珍しい赤米を栽培しておられる鈴木美津枝さん、それに「あした」の高橋良風さん、ころも連句会の連衆の方々、あわせて二十数名の方が待っておられ、早速、食事をしながら、二十韻を三卓に分けて作ることになった。その時、斎藤さん作詞・作曲の「連句のすゝめ」が、ギターの弾き語りで発表され、気分が一気に盛り上がり、笑声の絶えぬ活気にみちた一座になった。ころも連句会の中心である矢崎藍さんをはじめ、斎藤吾朗さんなど、若い方々が中心となっておられるだ

けに、何かムンムンした熱気が感じられる。私はもう三十年近くも連句復興を目ざしているわけであるが、この日のように燃え上った会を見たことはない。そして、連句を復興させるためには、このような若い方々の熱気が必要であることを痛感した。

その夜は、豊田市水原町の豊龍閣という旅館に一泊、ここでもまた、藍さん・慶子さんをはじめ、阿部都美子さん・石黒正子さん・八木聖子さん・加藤治子さん、それに同行した家内と、豊龍閣の若奥さん朱美さんを交え、計九人で二十韻を巻く。

梟の声牙ゆる月影

治

家路へと急げば火の玉ついて来る

朱美

世の鞭さへもしのび負ふ恋

聖

髭の濃い男を見れば彼に見え

美

暴走族も時に淋しい

藍

右は「川音の幽かにうれし螢宿 明雅」という発句ではじまる二十韻の名残の表であるが、この中に生まれてはじめて連句というものを経験した朱美さんの句が二句も入っているのがおもしろい。御当人はとても興味を示され、今後はころも連句会に仲間入りされるとか。こうして若い方々に弘

まっけて行くのはとても嬉しいことである。

翌日は豊田市の棒の手会馆という所で、今度は始めて、歌仙でお相手することになった。「棒の手」というのは、三河のこの地方に伝わる古い棒術の一つである。「棒の手会」という名前はかねがね承わっていたが、こんなすばらしい近代的設備のある会馆とは考えてもいなかった。びっくりさせられた。猿投山も古い歌枕である。私の発句「棒の手の懸声涼し猿投山」は、この会馆で、スイッチを押すと棒の手についている説明が流れてくる仕掛けになっている。裂帛の気合いを盛った古武道のかけ声が近代的設備をほころる会に響きわたっているのが印象的であった。十時から始まって、中に食事の時間を含んで、十五時には満尾由川慶子さんにまた三河安城駅まで送っていただき、帰京したわけであるが、この二日間、本当に楽しく、また皆さんの熱意が嬉しかった。矢崎藍さんをはじめ、三河の方々

杜若三河の旅の人やさし

明雅

猿投山

棒の手の懸声涼し猿投山  
 再会うれし光る青柿  
 曝書する子らの絵本もまじりゐて  
 あまりあてにもならぬ番犬  
 ビルのかど鋭角に射す月の影  
 心静かに酒あたたためむ  
 後の難十二単衣をきめ込んで  
 思はぬ人がやいのやいのと  
 金髪の若妻もゐて峽の村  
 ピアスの揺るるうすき耳たぶ  
 会議室出でて興奮さめやらす  
 三多ほどのことから  
 人の世は裏表あり寒の月  
 送り狼駅の北口  
 その昔机ならべし優等生  
 愛撫されたり蹴とばされたり  
 物言へぬ身を恨寝の花ごころも  
 桜の下に西行のごと

明雅 志津枝 藍 聖子 祥子 富佐子 次  
 藍 聖 枝 祥 同 藍 聖 枝 聖 同 藍 聖 枝 祥 富佐子 次

春風がはるか黄沙を運び来る  
 竜笛一声森の社に  
 黙禱の途中ポケットベルが鳴り  
 ひるげの仕度でもと軽やか  
 ごきぶりはごきぶりはいはいよけて行き  
 海辺の苦屋天草を干す  
 神経を少うし病んでアルペジオ  
 間遠になりし闇の語らひ  
 男色に溺れるなんて許せない  
 七十過ぎて自分史を書く  
 月天心動かぬごとく地はめぐり  
 谷に失せたる松茸のしろ  
 啄木鳥の杜に小さき家をたて  
 新人類のこの寺の僧  
 ハンディはシングルだよと高笑ひ  
 スコッチ二本今日の賞品  
 住みなれし矢作の川に花吹雪  
 風船飛ばし見はるかす原

聖 藍 聖 佐 祥 藍 次 聖 枝 聖 枝 祥

平成元年六月二十一日  
 於 豊田市棒の手会館

東 明雅 捌

梅雨晴れ

梅雨晴れの矢作大川見て飽かず  
 釣糸かすめ泳ぐあめんぼ  
 半ズボン腕白坊やの声のして  
 つくるおかずはコーンコロッケ  
 名月の光ななめに連子窓  
 秋の芝居のちらし貼らるる  
 そぞろ寒衿かき合はせ急ぎ足  
 言はせてみたいお前美人と  
 さりげなくデートスナップ親の前  
 東子ゴシゴシ洗ふ鍋底  
 老年の料理教室繁盛し  
 数珠も入れてる手提鞆に  
 動乱の天安門に凍つる月  
 特派員から受けし速報  
 つちのこが村のはづれに出たと触れ  
 観光コースで売店も立つ  
 花万朶修学旅行の人の波  
 巫女の排袴揺らす春風

郁子 道子 時子 慶子 治子 都美子  
 郁子 好子 慶子 美子 慶子 郁子 時子 慶子 美子 慶子 郁子 好子 美子 慶子 郁子

初虹の消え入りさうな山の端  
 ぶちの飼犬首をかしげる  
 一区画三十万の墓地を買ひ  
 ロールスロイスのお迎へが来て  
 あざやかに茶筌捌きの風炉点前  
 入歯は延期歯痛こらへよ  
 外出に末っ子だけを供につれ  
 思ひのたけをキャンバスに塗る  
 不倫はれ言ひ訳の種使ひきり  
 隣り近所が立てる聞き耳  
 月蒼く尺八の音の澄み渡る  
 妖怪変化古都の冷まし  
 烏来て軒の干し柿ついでみぬ  
 暴走族にモニター制度  
 無農薬野菜の籠の広げられ  
 柱時計のふりこせはしく  
 昇格の辞令ふところ花吹雪  
 のどかに酌まん「菊石」の酒

加藤 治子 捌

美 同 慶 時 郁 美 同 治 時 美 同 治 時 好 美 同 治 時

平成元年六月二十日  
於 碧南市小伴天

夏料理 東明雅捌

杜若

矢崎 藍捌

赤米

斎藤吾朗 捌

小伴天心づくしの夏料理  
床に活けられ匂ふ山百合  
キター弾くホリユームいっばい響かせて  
広い平野を樂しドライブ  
赤米の真紅の芒を照らす月  
温め酒を酌みかはず仲  
文化祭信濃乙女の話など  
戒壇めぐり鍵に触れざる  
このごろは大を飼って子がせがみ  
パート支払ひ消費税めき  
田安の続き泣く人笑ふ人  
ひっぱってくる外国の城  
冬の月背にして三三七拍子  
ミンクのコート買って頂戴  
灰色が引いて桃色就任す  
辻褄あはすための出鱈目  
老病の挙句は頑固一徹に  
古池の中群る養の子  
琴の音の澄める毛氈花吹雪  
鶯餅に春惜しむなり

明雅 良風 時代 千賀子 美津枝 かはる 優 好 東郁子 好 町内は血縁割って選挙戦  
杜若三河の旅の人やさし  
宗匠迎へ万緑の山  
厨房は大釜に湯をたぎらせて  
ちかごろグーな塗りの高杯  
よっちゃんと見たあの月は優み渡り  
紅葉のやうに類染める君  
秋大漁刺青の背に惚れさうらふ  
糊尾橋までさかのぼる潮  
オバタリアンもぶっ倒れたる  
ウォッカはインフルエンザの薬とて  
満月も凍て犬の遠吠え  
耳ふさぐ男の息のやはらかく  
春画のとほりやってみようよ  
宰相は言葉つまらせただ撫然  
天安門に散りし学生  
かずかずの身の上話屋台店  
いつしか止みぬふらこの音  
城跡に城建つる夢花爛漫  
春惜しみつつ歩む細道

明雅 藍 赤米 斎藤吾朗  
赤米に鰻を待つや小伴天  
佳き日佳き人集ふ梅雨晴れ  
夏帽子野外ホールに置かれぬて  
三毛のつそりと癖に現れ  
月あかり桐の木の間にはすかし見る  
菊の枕をぬらす片恋  
河鱈燃ゆる想ひをピンに入れ  
一億円も拾ってどうする？  
寝違へて後ろも向けぬ泣き笑ひ  
カラクリ茶坊主静々と出で  
神の留守おまはりさんもでき心  
凍てつき昇る上海の月  
白髪の原因の君と老いてはほ  
うす目でのぞく看護婦の艶  
ちよっとだけしゃれてみたんだ銀の鍵  
ワインかたむけ聞く弾き語り  
復元の古代船いざ出帆す  
春告げ鳥は今年また来る  
花吹雪石の仏の頭上にも  
ブランコゆらりひびにみどり児

明雅 志津枝 慶子 治子 富美子 慶 ひろし 金土 都美子 久世郁子 吾朗 治 土 都 富 慶 郁 治 枝

斎藤吾朗

連句のすゝめ

1. 何もかもがせわしない かたよった日々だから  
ちよいと俳諧連句でも巻いてみませんか  
五七五のイメージに  
小粋な七七 からませせて  
まるで芭蕉のように 古池とびこえた
2. 客の挨拶 発句には ベタ付け脇句の亭主どの  
第三転じて てにてらん 四句目 くつろいで  
いよいよお出まし お月様  
六句目そっと打ち添えて  
表六句はおこそかに 捌きも風まかせ
3. 裏に入れば のびやかに そろそろ恋句も二つ三つ  
仲を取り持つ雑の句に 時代も折り込んで  
大先輩に花もたせ  
付かず離れず差し合わず  
挙句のはての心地良さ しみ入る披露かな
4. 一度連句を巻いたなら みんな心のお友達  
日本の豊かな季節感 過去も未来もとびこえて  
一人一人の個性を  
集めて流れはきらびやか  
まるで芭蕉のように 泳ごう天の河

☆ 連句のすゝめ(斎藤吾朗氏作詩・作曲)が大流行である。と言ってもまだ我が家の中だけの現象であるが、斎藤さんから送っていたいただいたテープを、朝・昼・晩と食事のたびに聞いているうちに、夏休みで遊びに来ている五才の孫まで、すっかり覚えて、このごろは時にふれて大斉唱になっている。

この歌は、とても要領よく連句を作る時の心得が詠いこまれており、平易で覚え易い上に、明るいメロデーが魅力的である。A・C・Cでも皆さんに御披露したが、大好評でテープのダビングが次々に行なわれているから確実にひろまっているだろう。

十月半ば、江戸東京自由大学が開校され、俳諧を教えることになっているが、その際にも、この歌詞にそって講義することに決めている。この計画が成功すれば、益々この歌はひろがり、また、それに伴って連句も世間に弘まることになるだろう。

こんな素晴らしい歌を、作詞・作曲して下さった斎藤吾朗画伯に衷心からお礼を申し上げる次第である。

(雅)

夏帽子 市野沢弘子 捌

梅雨明くる 大窪瑞枝 捌

月の句について 東明雅

嘩されて一つ買ひけり夏帽子  
噴水あがる児童公園

竹煮草裏はの白くそよぐらん  
青磁の皿を床の間に置く

月の出を待ちて始まる祝賀会  
鴉の高音に目を覚ます猫

吾亦紅少女のうなじか細くて  
取れた釦が縁結びなる

ラプコール切れず切られず長くなり  
回転椅子に煙草くゆらす

地震津波かかはりなしと伊豆住ひ  
円空仏の笑める古寺

雪見月兔遊ぶと教へつつ  
背を丸めて芋を焼く婆

帆船のワインボトルに納まりぬ  
漫画の文字でイニシャルを書き

読み返す枕草子花の昼  
種を浸せる中庭の桶

高速路貫く街や梅雨明くる  
プール帰りの童らの賑ひ

白玉にたつぷり鮎をからませて  
絵皿時計は長椅子の壁

猫が来て毛並みつくらふ月の縁  
糸瓜の水を掌に受け

催促の鈴鳴らさるる今年酒  
雙名芝居うざら買ひ切り

ブラジャーは形状記憶合金で  
「問はず語り」を碧眼と読む

革命の二百年なる大行進  
空はるばると鶴渡るなり

口切りの茶事すませ来て窓に月  
音をたてずに入る終ひ湯

金剛山蔵王権現峰巡り  
疾風になびき舞へる淡雪

フロートに花のクイーンの片笑はば  
くぐれば匂ふりらの下枝

夏帽子の巻

4 青磁の皿を床の間に置く

5 月の出を待ちて始まる祝賀会

6 鴉の高音に目を覚ます猫

6 円空仏の笑める古寺

7 雪見月兔遊ぶと教へつつ

8 背を丸めて芋を焼く婆

10 想ひ出食べて生きてをります

11 ころの月を、どれも独自の気分が  
あつておもしろかった。ことにオス・ナオ  
11の月の句は珍しく、また、打越・付句も  
ともにすばらしく感心したが、ウ7の雪見

軽やかに鈴の音残し道路ゆく

うっかり出かける入歯忘れて

どの顔も違ひすぎたる芭蕉像

あなたが好きよ俗でないから

共に見し夢のことあんなこと

美談の陰に少し嘘あり

駅前のテレホンカードポイントで

メフィストフェレスと飛ぶ虹の街

朝帰り言ひ訳の数もう尽きて

想ひ出食べて生きてをります

つるべ井戸底にぼっかり月の影

地酒に漬けし猿のこしかけ

荏吹けば神立ち給ふ末の秋

平家落人谷の生業

桁台に指貫き缺みすや針

ちりめん雑魚の土産受け取る

築山を巡りし後の花被れ

春挽糸を紡ぐ縁側

いとしさの吾が嬰の涙風光る

快気祝に送る羽二重

良寛といふ箱書きを真に受けて

海底噴火続くくぐくぐ

器量良き妻を揃へて臘腸齋

悦楽無限欲りし帝王

女性誌のカラー写真のテクニク

トマトにレタスサラダよく冷え

もつさりと单身赴任駅に佇ち

電子手帳で住所検索

ペーカー街二二B霧の中

山高帽に月のぼんやり

給となりし雀を悲しみぬ

御弊の紙は爺が切り役

堅焼きの自慢煎餅で財を成し

句帳傍へに春のうたた寝

花の下チェロのケースの揺られゆく  
頭ふりふりのぼる風船

月は陰暦十一月の異称で月並の月となるから月の句としては失格で、ここをちょっと直していただきたい。

梅雨明くるの巻

4 絵皿時計は長椅子の壁

5 猫が来て毛並みつくらふ月の縁

6 糸瓜の水を掌に受け

6 空はるばると鶴渡るなり

7 口切りの茶事すませ来て窓に月

8 音をたてずに入る終ひ湯

10 電子手帳で住所検索

11 ペーカー街二二B霧の中

12 山高帽に月のぼんやり

オ5・ウ7の月は、ともに何者かが来て室内で月を見るという形になっており、類型的な句であるが、ナオ12の月は、前句を受け、シャロック・ホームズの面影らしく、題材にも表現にも親しみとおもしろさがあった。

★全国連句大会御案内★

期日 平成元年九月九日(土)・十日(日)

会場 山形県新庄市民文化会館

内容 (一)受付 (二)俳諧めぐり (三)懇親会 (四)芭蕉句碑除幕式  
(五)大会(講演・実作)

詳細は市民文化会館(〇二二三・二二・七〇二九)へ

